

[書 評]

『近代大阪の部落と寄せ場』

—— 都市の周縁社会史 ——

〔吉村智博著、明石書店、2012年、338頁、6800円＋税〕

小 林 丈 広

（同志社大学文学部教授）

1

小文は、吉村智博氏の近著『近代大阪の部落と寄せ場』を取り上げ、その意義と今後に残された課題について述べようとするものである。吉村氏は、長い間大阪人権博物館で学芸員をつとめられ、本書にもそこにおける史料調査や展示、聞き取りなどの成果が反映されているものと思われる。いわば、大阪において本書のような課題を追求するのにもっともふさわしい研究者の一人といえることができる。評者は、大阪での調査の経験も乏しく、大阪をフィールドとする研究の歩みも十分に理解しているわけではない。したがって、本書の書評をお引き受けするには適任とはいえないが、及ばずながら何とかその責を果たしたい。ここではまず、本書の構成を紹介したい。

序章 社会的差別にかかわる歴史的研究の意義

第Ⅰ部 都市部落の構造と生活

第1章 都市部落史研究をめぐる課題と方法

第2章 西浜部落と学校経営

第3章 西浜部落と学区問題

第4章 西浜部落と皮革産業

第5章 西浜部落と方面委員

第Ⅱ部 寄せ場の形成と展開

第6章 寄せ場と日傭労働研究をめぐる課題と方法

第7章 釜ヶ崎の形成

第8章 釜ヶ崎の生活構造

第9章 総力戦体制期の釜ヶ崎

第10章 社会調査と釜ヶ崎

終章 近代都市における部落と寄せ場の歴史的位置づけ

本書は、序章のタイトルにもあるように、「社会的差別」を「歴史的」に検討することを課題とするという。その際、対象地域を、「都市」大阪における被差別部落（以下、部落）と日傭労働者街（以下、寄せ場）、具体的には大阪市街地の南部に点在し、全国的にもそれぞれを代表する地域として知られた西浜部落と釜ヶ崎に絞り、そこに内在する主体的営為や支配構造、都市に組み込まれる中で担わされた機能、部落と寄せ場との相互関係（著者は「相関関係」と記す）などを明らかにしたいとする。また、終章では本書を通じて具体的に検討した内容についてまとめ、今後の課題についても明示している。そこでまず、序章・終章も参考にしながら、本書の各章について、その成果を紹介したい。

第1章は、第Ⅰ部の西浜部落を分析するた

めの視点を示すために、これまでの研究史を整理するとともに、西浜部落の概観と使用した史料などについて述べる。これまでの研究史については、都市（下層社会）史研究と近代部落史研究とに分け、前者をさらに、①都市政治構造・支配構造をめぐる研究、②部落の内部構造と都市行政をめぐる研究、③衛生観と隔離をめぐる研究に、後者を、①地域支配（構造）と地域社会をめぐる研究、②貧困・低位像の克服をめぐる研究に分ける。また、対象となる西浜部落については、「近世以来の地域を単に「西浜町」と記し、新しく拡大した木津北島町を含む時は「西浜部落」と総称することにすると明記する。また、「西浜町は、栄小学校の「設置主体」であると同時に「設置区域」でもあった」という（44頁）。著者によれば、「西浜町」=「栄学区」であった。

以上の前提を受けて、第2章と第3章では、西浜部落と学校経営、学区分合問題などを取り上げる。そこで論述されているのは、栄小学校の学校経営の具体像である。著者は、大阪市立中央図書館所蔵の「南区役所行政文書」なども活用して、大小便売却金による学校維持方法や学区分合の経緯などについて詳しく述べる。とくに、栄小学校の維持方法については、明治初期大阪における小学校経営の実像を明らかにしたものであり、この時期の教育史研究としても興味深い。

また、西浜町に隣接する木津北島町の帰属をめぐる学区分合問題の展開は、部落問題の近代におけるあり方を考える上で示唆的である。著者は、木津北島町を木津連合学区から分離して西浜連合学区に包含させようとの動きが起こる1900年代中頃から、西浜連合学区への包含が実行される1921年までの時期に、木津北島町を含む「西浜部落」が成立したと考えているようである。1921年前後の経緯が明らかにされていないのが残念ではあるが、学区分合との関係で部落の形成過程を説得的に説明する。

第4章では、西浜部落の皮革業者を代表するものとして新田帯革を取り上げ、その創業者である新田長次郎の経営者としての特質を明らかにする。著者は、大阪市史編纂所所蔵の新田帯革関係文書などを活用してその経営状況を明らかにし、同社の大阪の皮革業界内での位置を鮮明にした。さらに、「新田が部落民を採用しなかった」というこれまでの通説も再検討し、著者のいう「新田長次郎の社会的役割」を浮き彫りにする。本章では紹介程度にとどまっているが、新田が木津北島町に私財を投じて「貧民学校」（私立有隣小学校）を設立した人物であることも、第3章との関係で重要な意味を持つ。

これに続いて第5章では、1924年に衆議院議員となるなど政治家としても活動した皮革業者沼田嘉一郎を取り上げ、西浜部落における地域活動に焦点を当てる。沼田が方面委員として地域での活動を担当した「栄方面」は、西浜町に木津北島町も含めたいわゆる「西浜部落」であり、救護法施行に尽力した政治活動と関連づけることで、その実践の意義を跡づける。また、沼田の電灯市営化問題や学区廃止問題などについての市会での発言も紹介する。これらは、1920年代から30年代にかけての地域政治史研究としても貴重な成果といえるであろう。

第6章は、釜ヶ崎を対象とする第Ⅱ部の研究史整理と課題設定、釜ヶ崎の歴史的概観などにあてられる。ここではまず、従来の日傭労働（者）史研究の歩みをたどりながら、なお釜ヶ崎の生活構造に言及した成果は少ないとして、釜ヶ崎に即した研究についても整理する。著者が釜ヶ崎史研究の中でとくに再検討を必要としたのは、木賃宿が集中していた長町（名護町）と釜ヶ崎との関係であった。

第7章は、第6章で課題とした釜ヶ崎の形成を正面から取り扱う。著者は、従来の釜ヶ崎史研究の多くが、同地域の形成の契機として「第五回内国勸業博覧会開催（1903年）にともなう長町住民「移転」や日本橋筋拡幅工

事をあげ」ている（190頁）のに対し、長町がその後も芸人・流民層、無職困窮者層などの集住地域となることから、それぞれを別の要因により形成されたものとした。

第8章では、日傭労働者街としての釜ヶ崎の生活実態を明らかにするため、木賃宿関連法令の特徴を明らかにする。著者はここでも、長町の木賃宿が釜ヶ崎に移転したとする従来の説を検証し、木賃宿関連法令が許容する止宿人の内部に日傭労働者が増大していく過程を明らかにした。

こうして形成された釜ヶ崎は、昭和恐慌期には密住地区として社会政策の対象となる。第10章では、大阪の都市下層社会が新聞のルポルタージュや内務省・大阪市などの社会調査の対象としてどのように取り上げられてきたかを概観する。表10によれば、釜ヶ崎が初めてルポルタージュに取り上げられるのは、1899年に出版された『日本の下層社会』であり、1915年に『救済研究』に連載された「貧民窟探検記」以降、1910年代後半に盛んになる社会調査では頻繁に取り上げられるようになったという。

1920年代、この地域は、「労働力人口の調整弁としての役割とともに、スラム・クリアランスによる居住者の受け皿としての機能も担っていた」という（268頁）。しかし、総力戦体制期になると釜ヶ崎でも町会連合会の組織化が図られる。1942年には、萩之茶屋町会連合会の68%が釜ヶ崎の住民によって占められたという。第9章では、このような釜ヶ崎の第二次世界大戦下における実態を明らかにする。

以上、長期にわたる地道な調査と学際的な研究成果である本書の紹介としては甚だ疎略ではあるが、その一端をかいつまんで紹介させていただいた。ここにも記したように、各章の内容は課題の解明のために必要な一次史料を博搜し、的確にその内容を分析したものであるということができよう。

2

次に、本書から垣間見える今後の課題について述べておきたい。

まず第2章であるが、本章が対象とするのは、1890年代までの栄小学校の学校経営である。ここで明らかにされたのは、屎尿処理に特権を有する西浜町の学校経営であり、いわば確かな財政基盤がある学区の財政状況である。これ自体、重要な成果ではあるが、この問題と、1879年に同町が西成郡に編入された際に「名望家」たちは怒りをおぼえ、かつ絶望に追いやられた」（72頁）こととはどのような関係にあるのであろうか。学校経営に「名望家」たちが重要な役割を果たしていたことは想像に難くないが、だからといって、「郡部に編入されたならば、「最早やぶれかぶれなり、学校をも打毀ち区戸長総代の家をも敲き潰して之を殺し、思ふまゝに腹癒をせん者」と言い出せし者」が出る」という感情が発現することとの間には、相当の開きがあるのではないだろうか。この怒りは、同町が大阪市域をはずれ西成郡に編入された問題の大きさをうかがわせるものではあるが、その理由を学校経営の内情から解くのは難しい。おそらく、別の課題ではないだろうか。また、本章のタイトルが「西浜部落と学校経営」となっているが、第1章の定義からいえば、「西浜町と学校経営」とすべきではないだろうか。

実は、西浜町が西成郡に編入されたことに対する同町の「怒り」を掘り下げることができれば、第3章の前半で述べられている1897年の同町の市域編入の意義がより明確になるのである。その上で、後半では西浜町に隣接する木津北島町の問題へと展開する。木津北島町は、この地域で盛行した皮革産業の労働者が集住したことによって新しく町場化した地域であるが、1900年代には「特殊部落」視されるようになったという。西成部落は、この木津北島町が西成町の学区（西成連合学区）に包含されることによって形成されたのであった。これらは、近代社会における部落間

題の形成を考える上で重要な指摘である。

そこで、西成部落の形成(拡大)を考える上で重要な役割を果たした皮革業に論を進めることになるが、新田長次郎と沼田嘉一郎に着目したのは適切であり、それぞれの章にはこれまであまり知られていなかった両者の具体的な活動が描かれた。ただ、この両者が第2・3章にも登場して、具体的な活動の様子が描かれていれば、この構成がより生きてきたことであろう。たとえば、第3章でも私立有隣小学校との関わりで新田の活動が具体的に紹介されていれば、第4章の議論はより膨らみを増すことになったであろう。

こうしてみると、第2・3章において「名望家」の役割が強調され、表2-⑦では、多くの人名が掲げられているが、本文中にそれらの活動の姿がほとんど描かれていないことに気づかされる(さらに、その後新田や沼田などが登場するなどといった世代交代についても述べられていない)。新聞なども相当検索されたのであろうが、具体的な人物の動きはあまり出てこなかったのであろうか。新田や沼田についても著名な人物の割には、新聞記事の使用頻度が低いように感じた。『西浜水平新聞』などを利用しているのは、本書の重要な成果であるが、有力者は『大阪毎日新聞』などといった一般紙にも登場する可能性が高い。こうした一般紙や行政文書などを検索し直すことで、新田帯革の関係者や親族、沼田と同じ政治グループに属する人々の行動などを通じて、それぞれの人物像や西成部落の動向をより立体的に描くことができるものと思われる。

第7・8章では、釜ヶ崎の形成について、長町からの木賃宿移転説を否定している。これ自体は興味深い論点であるが、すでに指摘されていることでもある。この問題提起をより意義深いものにするためには、大阪という都市全体の労働市場の中での長町や釜ヶ崎の位置を明らかにする必要がある。これは、釜ヶ崎の生活構造を第8章のように丁寧に論じても十分には浮かび上がってこなかったよ

うであるが、そこまで論じることによって、著者の意図がより明らかになるように思われる。

第9章で取り上げられる第二次大戦下の釜ヶ崎で展開した町会(表9-④に示された10の町会)は、図6-Cの地図とも対応しており、興味深い。これが戦後の地域社会に受け継がれたのかどうかなど、今後の地域社会研究の可能性を感じさせる。ただ、表9-④の町会と、272頁の引用史料に登場する昭和会・一成会など7つの町会とはどのような関係にあるのだろうか。注36にあるような説明が、7つの町会全体に対して丁寧になされていれば、よりわかりやすかった。

こうしてみると、西成部落と釜ヶ崎を本格的に分析の対象とした本書においても、なお残された課題は多い。ただそれも、本書において到達した問題の広がりから派生したものであり、今後より多くの研究者が参入することで深められることを期待したい。

3

以上、本書の各章について、読み取れる範囲での所感を記してきた。読み込み不足で、不十分な指摘にとどまっているところも多いと思うが、ご寛恕をお願いしたい。

その上で、序章にも掲げられた本書の課題について、若干のコメントを述べて締めくくりとしたい。最初に記したように、本書は「社会的差別」を「歴史的」に検討することを課題としている。西浜部落と釜ヶ崎はその対象として格好のものということができ、本書でも紹介しているように、すでに1980年代には玉井金五・杉原薫編『大正/大阪/スラム』(新評論, 1986年)、近年では加藤政洋『大阪のスラムと盛り場』(創元社, 2002年)、水内俊雄・加藤政洋・大城直樹『モダン都市の系譜』(ナカニシヤ出版, 2008年)など、歴史学だけではなく、社会学や地理学などの分野からも様々な仮説が提示されている地域でもある。それに対して、本書が明らかにしているの

は、たとえば第2章では西浜町が確かな財政基盤の上で熱心に栄小学校の学校運営に取り組む姿であり、第4章では重要輸出品として拡大していく皮革業が大阪南部に有力な産地を形成していく過程であり、第5章では西浜部落からも有力政治家を輩出し、方面委員活動が担われているという事実であり、第9章では釜ヶ崎でも町会が担われていくという実態である。評者は、このような事例を「周縁社会史」というような副題で論じるのには違和感がある。むしろ、都市大阪の中心に位置するような事例ではないだろうか。

それでは、著者はどのような意味でこれらを「周縁社会史」と位置づけたのであろうか。評者が序章から推察するのは、これらが地理的な関係において旧市街地の「周縁」にあるだけでなく社会的にも「周縁」に位置づけられたとする先行研究を受けて、その歴史的な内実に向かい迫ろうとしたということである。序章ではそれを、「社会構造の特質や社会関係の固有性などを実態に即して明確にした上で、当該問題の本質を探り出す行為」とも記している（8頁）。そこで序章から著者の研究視角にあたる部分を引用してみると、次のようである。「西浜部落や釜ヶ崎は、ともに歴史上も現在においても社会の偏見や蔑視の対象とされ続けているという共通性をもっている。そしてまた、大阪市の「市区改正」事業などの行政運営によって意図的に各種の都市機能を分担するように定置された地域でもある」（9頁、傍点引用者）。しかし、これまで述べてきたように、本書では、1879年に西浜町が市域から西成郡に編成替えになったこと、1921年に木津北島町が西浜連合学区に包含されたことなどについては、史料の制約もあってか十分には論じていない。また、沼田の政治活動を見ても、大阪市会などにおける西浜部落や釜ヶ崎に対する差別や排除の具体像や、日傭労働者の困窮や集住の態様が指摘されているわけではない。むしろ、沼田も都市大阪の中心的政治家の一人であり、新田長次郎も

中心的な実業家の一人であることに論述の力点が置かれているように思われるのである（有隣小学校設立に関していえば、釜ヶ崎で新田の役割を果たしたのは、徳風小学校を設立した久保田権四郎（久保田鉄工所創業者）である）。

そこで評者が感じるのは、著者は、本書のような実証的歴史分析を通じて、西浜部落や釜ヶ崎が都市大阪の「中心」（あえてこのような言葉を使わなくても良いが）であることを主張すべきだったのではないかということである。そうした観点から論じれば、今後さらに調査を進めることで、新田の実業家としての活動はより魅力的に、沼田の政治活動はより豊かに明らかにできるのではないだろうか。また、表2-⑦に記載されている「名望家」や、その後の地域指導者らの行動もより明らかになるのではないだろうか。

一方、もし新聞検索をより徹底すれば、著者が当初の課題とした「社会的差別」の解明にもより多くの手がかりが得られる可能性がある。というのも、「社会的差別」の多くは、当該地域に対する外側からの言説として展開することが多く、噂話などが史料として残りにくいことを考えれば、新聞や文学作品（さらには市会議事録や行政文書）などが数少ない手がかりだからである。言説は、実態とずれがあるところに意味があるので、実態の研究だけでは浮かび上がってこない問題を明らかにする。これまで、こうした観点からの神戸や京都を対象とする研究では、「貧民部落」という観念が目立った（安保則夫『ミナト神戸コレラ・ペスト・スラム』（学芸出版社、1989年）や評者『近代日本と公衆衛生』（雄山閣出版、2001年）など参照）。これは、1890年代から1900年代にかけて、地域をめぐる報道や行政施策の中で頻繁に用いられたことから、この時代の社会的差別の特徴を明らかにするのに意味があると考えられたからである。しかし、本書ではこれらの言説の変遷には注目していない。たとえば、表10で、ルポルタージュや社会調査で釜ヶ崎などが対象となっている

かどうかについて整理しているが、それぞれがどのような文脈で、何と呼ばれていたかについては述べられていない。

こうしてみると、本書はあくまでも西浜部落や釜ヶ崎の実態解明を目的としており、その結果として、両地域が都市大阪の中心を占める重要な地域であることを明らかにしたといえよう。評者は、どのような地域であっても、実態解明が行われないことには、言説だけが一人歩きする危険性があるので、本書のようにまずは実態解明を優先する姿勢に共感する。ただ今後は、これまでのような研究を推進されるとともに、言説とのずれをも視野に入れて論じて頂けることを期待したい。

最後に、著者は今でも大阪人権博物館にお

いて歴史研究者としての実践を続けている。詳しくは、著者による「博物館における表象行為と社会的差別」(『人文学報』第100号, 2010年)、「大阪人権博物館のリニューアルをめぐって」(『歴史学研究』第889号, 2012年)などに譲るが、こうした経験が広く共有され、新たな実践の糧となることを期待して筆を擱くことにしたい。

小文脱稿後、「近現代・被差別部落の類型論」『部落解放研究』第200号(2014年)を発表した。あわせて参照されたい。また、小文は科学研究費補助金基盤研究(C)「近代日本における都市制度形成過程の総合的研究」による研究成果の一部である。